国立ハンセン病資料館
資料館だより

2019.1.1　No.102（季刊）
編集　国立ハンセン病資料館
発行　公益財団法人日本財団

目次

P1　明けましておめでとうございます　2019年元旦
P2　「生誕100年　島比呂志展」
　　ギャラリー展＆立石富生氏の講演会を終えて
P2　普及啓発イベント続々開催！
　　「プロカメラマンと撮る全生園」、映画「あつい壁」
　　上映会、「親子でハンセン病をまなぼう」活動報告
P3　資料紹介　その②　大風子の実
P3　研究から　ブックレット『橋を渡る』刊行
P4　資料館の現場から　その⑨　受付業務について
P4　お知らせ／利用案内

明けましておめでとうございます　2019年元旦

館長　成田　稔

年の明け暮れは早いもので、私も全生園を去って26年目を迎えました。週に一度だけですが、治療棟から納骨堂あたりまでの中央通りを歩いていて、入所者の方々に出会うことは、いつの頃からかほとんどなくなりました。

寂れた裏道を歩く感じですが、11月の全生園まつりの折は相も変わらず賑わっています。これが療養所の中だろうかと怪しみながら、ここに至るまでの変転がふと思い浮かびます。

かつてハンセン病による顔面の変形、要するに化学療法の普及以前に目立つ後遺症を持った人々は、いろいろな病気その他への抵抗力を弱めて早世し、逆に普及以後は人目に付くほどの後遺症を認めず、これら諸々の因子の消滅が、ハンセン病療養所のイメージを一新させました。このような実態が、「らい」からハンセン病への呼称の変更（1996年「らい予防法の廃止に関する法律」の施行）と軌を一にしていたとも言えます。

しかし実際には、化学療法普及以前のイメージにもとづく偏見が、いまだに残っています。これをなくすためには、どのような取り組みが必要になるのでしょうか。

まずはハンセン病についての必須の知識を伝えることだと考えています。例えば多剤併用療法による治療。治療は外来通院でよく、その間に従来の生活様式を変更する必要はないこと。また治療が始まれば感染源になることはなく、適切に治療されれば確実に治癒することなどを示します。

次に従来の「らい」と呼ばれていた時代の忌避的なイメージを改めて示し、それが現在のハンセン病の感染、病態、予後には全く認められないことを再確認してもらいます。

このような形式での社会啓発を、当館に関連のある情報紙、講演会などのあらゆる機会を通して周知します。

「普通の感染症」であるという、ハンセン病についての正しい知識の普及啓発は、当館の設置目的である「名誉の回復」に直結する課題であると言えます。

最後になりましたが、皆様のご健康を祈り上げますとともに、今年も催し物その他の折には、ぜひともご来館いただけますよう切にお願い申し上げます。

村上梅林（多磨全生園）

「生誕100年　島比呂志展」

ギャラリー展&立石富生氏の講演会を終えて

大島青松園・星塚敬愛園を拠点に文芸活動を続けた島比呂志の生誕100年を記念したギャラリー展を昨年11月17日（土）から12月7日（金）まで開催しました。

「書くことは生きること」という言葉を残している島は、文芸同人誌『火山地帯』を40年間主宰するなど、入園者や療養所の職員、社会の人々からなる同人作家との文芸活動に情熱を注ぎ、詩や評論、小説を書くことを通して社会との交流を求め、差別や偏見とたたかいつづけました。国賠訴訟では提訴をよびかけた最初の1人として原告勝訴の画期的判決を勝ちとりました。

その長きにわたる活動の源は、自身の内なる情熱だけでなく、その創作意欲を時として駆り立てた詩人・大江満雄ら社会からの訪問者がいたことも本展では取り上げました。

12月1日（土）には、『火山地帯』の編集・発行を引き継いだ立石富生氏による講演会を開催しました。島は常に何かを「訴える」ことを自身の作品に求め、同人作家の作品にも厳しく、思いつきで書くことを許さなかったといいます。書くことに情熱を傾け、妥協を許さない島の一面を感じるお話でした。

ご来場いただいたみなさまにお礼を申し上げるとともに、本企画を入り口に島比呂志の文学に触れていただければ幸いです。（橋本彩香）

「島比呂志の生涯と文学」講演会の様子

普及啓発イベント続々開催！

「プロカメラマンと撮る全生園」、映画「あつい壁」上映会、「親子でハンセン病をまなぼう」活動報告

昨年、当館ではより多くのみなさまにハンセン病問題について知っていただくため、様々な来館者に合わせたイベントを開催いたしました。

9月29日(土)に開催した「プロカメラマンと撮る全生園」では17才～25才の若い参加者が思い思いに園内の撮影を行った後、黒﨑彰さん(写真家)より講評をいただきました。全員、療養所へは初めての訪問で「写真を撮ることを通して療養所やハンセン病回復者について知るきっかけになった」と感想を残す参加者もいました。

「プロカメラマンと撮る全生園」園内撮影の様子

11月3日（土）には映画「あつい壁」上映会を行いました。多くの方が会場につめかけ、上映前の中山節夫監督による映画制作の過程や監督とハンセン病問題との関わりについてのトークにも熱心に耳を傾けていました。1970年に制作された映画に、多くの方から「感動した」、「自分自身を見つめなおすきっかけとなった」という感想が寄せられました。

11月10日（土）には「親子でハンセン病をまなぼう」と題し、アニメ上映会と平澤保治さん（多磨全生園入所者自治会長）のお話会を開催いたしました。参加者からは平澤さんのお話を通して「人権とは何か、生きるとは何かを考える機会となった」との声がありました。

今後も様々な企画を行いたいと思います。みなさまのご参加をお待ちしております。（金貴粉）

「親子でハンセン病をまなぼう」参加者との一枚

資料紹介　その②
大風子の実

日本ではプロミンが登場する1948年頃まで、ハンセン病の主な治療薬は大風子油（読み方は、タイフウシユまたはダイフウシユ）でした。今回はその原料となる種子を持つ、大風子の実を紹介します。

大風子は南アジアから東南アジアが原産の植物です。紀元前６世紀頃、その実を食べたインドの王のハンセン病が治ったという伝説もあります。日本には16世紀半ばに中国から持ち込まれ、『本草綱目』が伝わった1606年以降、本格的に治療に用いられるようになったと言われています。江戸時代には内服薬として広まっていたようで、1870年に後藤昌文が用い、1886年頃息子の昌直がハワイで世界初の注射での使用を試みました。また1888年岡村平兵衛が製造を始め、後に内務省衛生試験所が作るまで、日本薬局方の標準油として世に供給しました。

このように長い歴史を持つ大風子油は、療養所ができてからも治療薬であり続けました。各療養所の年報によると、用い方は筋肉注射や静脈注射が多いようですが、内服や塗布も見られます。後には大風子油酸エチルエステルなどの製剤も登場しました。当館で展示している大風子油に、グリス状と軽油状の違いがあるのはこのためです。また収蔵庫には丸薬や、種の絞りかすも所蔵しています。絞りかすは2005年に岡村平兵衛様からいただきました。強烈な臭いを放ち、当館の収蔵資料の中でも珍しく嗅覚に訴える資料です。

実は大風子油は、機序や効果が解明されないままでした。それでも治せる時代ではなかったからこそ、その歴史の長さに多くの人が希望を託したのでしょう。治癒への願いを支えた、重要な薬です。

（稲葉上道）

研究から
ブックレット『橋を渡る』刊行

国立ハンセン病資料館ブックレット４『橋を渡る―邑久長島大橋架橋30周年記念』を刊行しました。

瀬戸内海の離島・長島には、長島愛生園と邑久光明園の２つの療養所があります。昨年は、1988年５月９日に邑久長島大橋が開通してからちょうど30年でした。架橋は、1972年から足かけ17年におよぶ入所者運動の末に実現したものでした。運動のさなかには、橋が架かるのを夢見ながら、橋を見ずに亡くなった入所者がたくさんいます。

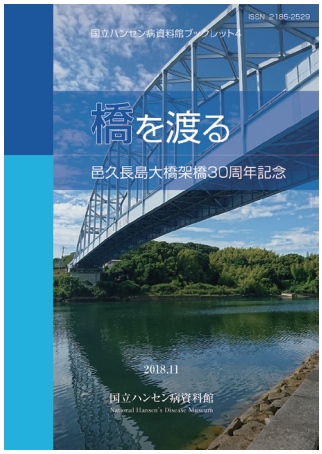
当館の常設展示室では、架橋についてパネルによる説明があり、架橋運動で使用された横断幕の実物を展示しています。しかし、架橋運動を中心に据えた調査研究は今回が初めてです。

本書作成にあたり、当館学芸員が昨年の６月と８月に両園に所蔵されている架橋運動関連の資料を改めて調査し、また、架橋運動当時を知る入所者のインタビュー調査を実施しました。

本書は、冒頭に学芸員による架橋運動史のポイント解説を置き、今回の調査成果である聞き書きの記録、橋を主題とした文芸作品、写真資料等を中心に紹介しています。巻末には年表を付けました。

邑久長島大橋は、「人間回復の橋」とも呼ばれるとおり、両園に隔離された人びとと、対岸に広がる「社会」をむすぶとともに、隔離と開放、差別と交流とが交差する場でもあります。

たんに30年前に橋が架かったことを祝うというだけでなく、その実現までに入所者による血のにじむような運動がつづけられたことを記録に残すことができました。読者のみなさまには、「この橋を私たちが人間回復の橋にしていけるかどうか」という現在もなげかけられている課題を受け取っていただければ幸いです。ブックレットは受付にて配布しています。



（木村哲也）

資料館の現場から　その⑨
受付業務について

今回は受付の仕事について紹介します。受付は、来館者が資料館に入ってきて最初に顔を合わせる職員なので、第一印象を左右する大切な役割です。

モットーは「明るく」です。気持ちよく入館していただき、来てよかったと思ってもらえるようにと心がけています。

仕事は、資料の配布や催し物の案内、簡単な質問への対応等、多岐にわたります。

現在、受付には４名が交替して入っています。私たちは15年前、高松宮記念ハンセン病資料館の時代からこの仕事についています。当時は、開館日は週５日間で、開館時間も13：00～16：00の３時間だけと短く、入所者の方も受付をしていました。

また、現在は業者さんにお願いしているトイレ掃除や玄関の掃除も当時は受付の仕事でした。

昔は入所者の方が元気で、資料館によく雑談をしに来ていました。15年前は多磨全生園に入所者が約400人いました。今は約160人となりましたが、今も入所者の体験を聞くのは勉強になりますし、なにより、何気ない日常会話や、最近あった出来事を聞くことが楽しいです。これからもお元気な姿を見せに資料館に来ていただけたらうれしく思います。

受付業務の面白いところは、お客様の声がいちばん早く届くことです。ガイダンスDVDの上映は、今までは団体10名以上でないと見ることができなかったのですが、今年度からは、日は限られていますが、個人で来たお客様にも見ていただけるようになりました。受付でもその案内ができるようになったのはよかったです。その他、いくつかのご要望の声も届いていますので、今後、実現できるものはなんとか対応できるようになるといいですね。

資料館は、回復者の名誉回復のための施設です。昨年からイベントも多く組まれています。今年もイベントなどを通じて、これまで来館したことのない新しいお客様にも来ていただきたいです。受付一同、お待ちしています。

（谷口喜代子・赤石和子）

お知らせ

■第６回多磨全生園絵画展

日時：１月20日（日）まで
場所：ギャラリー
主催：多磨全生園入所者自治会
　　NPO法人 東村山活き生きまちづくり

■よみがえる歌人・明石海人

日時：２月23日（土）13時30分より
場所：映像ホール
主催：動物介在活動団体「ぷらす」

■報道マンに訪れた“人間回復”
～ハンセン病回復者との出会いから～

講師：小川秀幸氏（三重テレビ放送 報道制作局長）
日時：２月24日（日）13時30分より
場所：映像ホール
主催：国立ハンセン病資料館

※その他決まり次第ホームページに掲載します。

利用案内

■開館時間　9：30～16：30（入館は16：00まで）
■休 館 日　毎週月曜日（祝日の場合は開館）
年末年始、国民の祝日の翌日、
館内整理日
■入　　館　無料
■交　　通

・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「ハンセン病資料館」下車）

・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
（「ハンセン病資料館」下車）

・ＪＲ武蔵野線　新秋津駅より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「全生園前」下車、徒歩10分）
または徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
TEL 042-396-2909　FAX 042-396-2981
URL http://www.hansen-dis.jp